

国際化と多様性

平成国際大学では、令和6年4月から、「日本語別科（留学生別科）」を開設することとなった。日本の大学や大学院への留学に必要な日本語能力等を身につけるための日本語教育機関として開校することで、多くの留学生が入学をし、さらにキャンパスが賑わうことだろう。

部活動では、女子硬式野球部に所属のスポーツ健康学部4年、瀧石かの子さんが読売ジャイアンツ女子チームに入団することに決まり、スポーツ健康学部4年、小坂未羽さんは、埼玉西武ライオンズ・レディースに入団が決まった。両選手の活躍が期待される。また、女子硬式野球部では、恒例となっている日本酒づくりが今年で3年目となり、野球と日本酒づくりの「二刀流」を継続している。「田植え」「収穫」「仕込み」と選手が携わったお米で醸した純米大吟醸酒となっている。

部活動だけでなく、法学部3年の今野菜那さんと法学部4年の河野佑知さんが、身を投げようとした女性の人命救助を行い、久喜警察署より感謝状が授与された。

継続力の大切さ



校友会会長 高井 勝弘

正月早々、スマホの緊急地震速報が鳴り、慌ててテレビを観るとアナウンサーが叫ぶように避難を呼びかけていました。能登半島地震にて、被害に遭われた方も沢山おられます。被災された方々に対しては、一日も早く平穏な日常が戻ることを願っています。

今年度も校友会では、大学祭で同窓生の講演会を行い、成績優秀者表彰では、多くの方が表彰をされ、毎年度校友会で行うことができることを大変うれしく思います。

成績優秀者表彰の中で、2年連続、ボクシングバンタム級の堤聖也選手が、モンスタートーナメント決勝にて勝利をし、日本王座を4度防衛されたことを表彰しました。今後は世界に向けて活動されるとのこと。イベントを続けていくことで、校友会活動を知っていただき、同窓生のコミュニケーション場などに貢献できていければよいと考えております。

校友会では、一人でも多くの方が活躍できるように支援をしたいと考えておりますので、今後とも皆様からのご協力をお願い申し上げます。



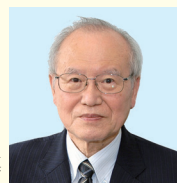
第17号

2024年3月発行

学校法人 佐藤栄学園
平成国際大学 校友会会報

令和6年春

平成国際大学 学長 柏木 俊彦



世界は、狩猟社会から農耕社会へ、そして18世紀の英国の第一次産業革命による工業社会へと変化したのち、19世紀の米国の自動車産業にみられる労働集約型の第二次産業革命、20世紀後半の生産過程にエレクトロニクスを導入することにより始まった第三次産業革命が続きましたが、現在の日本は、少子高齢化、労働力人口の減少、地方都市人口の減少といった新たな課題に直面しています。今は、情報化時代と言われ、技術面においてはデジタル技術の出現が社会生活全体に大きな影響をもたらす等、日本が大きな変革期にあることは間違いのないところです。

令和6年は能登半島地震という自然災害や、飛行機同士の衝突事故といった人々による災害を連想させる悲劇的なニュースで始まってしまいました。変革期にある日本社会にあって災害をも含めて、新たな発想でこの時代を乗り越えていかなければならないことを想起させ気持ちを引き締めさせるニュースでありました。

地域を通じて社会に貢献できる大学の在り方を考え、将来の足掛かりとなる1年にしたいと考えさせる年始めでありました。

コロナ禍で失った「時」の重さ

校友会顧問 副学長 浅野 和生



コロナ禍も過去のものとなりつつあるが、2020年春から2023年春まで満3年間の長きにわたって海外渡航が困難だった。コロナ禍以前のイギリスでは、空港でも駅でも美術館、博物館、レストラン、土産店でも現金払いが普通だった。しかしこの2月、4年ぶりに訪れたロンドンでは、支払い機会の80%で、現金払いは不可能だった。空港でも駅でもレストランでも売店でも、カード払いしかできない、現金払いができないところが多い。これほどの社会的変化は、通常時間の経過とともに徐々に進むが、コロナ禍が二つの分断をもたらした。第一に、非接触が推奨されたことで、現金払いからカード払いへとというトレンドが一気に加速され、変化のスピードが不連続となった。第二に、海外渡航客は、その変化を現場で経験する機会を奪われた。二つの分断の結果、突如社会が変わったようなことになった。コロナ禍による社会的変化は、世界史レベルの事象として研究テーマになるのだろう。